

大化改新後國造再論

虎尾俊哉

はしがき

私は数年前に「大化改新後の國造」(『學藝』)なる
草稿を草して、津田左右吉博士及び植松孝穆氏が、
大化改新後に國郡制下の一國に一員の新しき神祇制
度上の國造制が設置されたこととされることを承認し、た
ゞ、その設置の時期と職掌とに關していさゝか卑見
を述べたことがあつた。

ところが、其の後、新野直吉氏に此の向題に關す
る論文の⁽²⁾あることを知り、一読の機會を得たが、氏
の論文中には卑見と顯著に相違する一處の存するこ
とを知つた。それは遷紋令部司條に見える「國造」
の詔義に關するものである。氏の論は、私が前稿で
向題とした範圍に關する限り、ほぼ植松氏の論に近
いものであるが、併し、右に述べた相違點は、前稿
に於ける植松氏の説に対する批判を以てしても掩ひ

盡せないものである。そこで、何時か機會を得て此
の點を再検討し度いと思つていたが、生來の怠惰と
關心の移動との爲に、仲々果せないで居たところ、
昨年に至つて、新野氏は「再び大化改新後の國造
について」(『國史學』)なる論文を発表され、前
稿の拙稿の一部に批判を加へられ、更に本年、「大
化改新後の國造」研究の到達點となる題下に學界
動向の紹介を試みられ(『國史學』)、私見にも
觸れられるところがあつた。これらに依つて種々啓
発されることの多かつたことは後述の如くであり、
その學問を磨き進めなければならぬが、併し、前稿
の相違點だけは、遺憾ながら卑見を改め得ないので
ある。そこで、これ以上怠惰のせしりを受けない
爲に執筆に取りかゝつたところ、最近に至つて、極

田義彦氏が「国造新考」(神道學)なる論文を發表され、大化改新後の新国造制設置を唱ふる説は「全く架空の説であり、書辭の如きものに過ぎない」といふ新説を提示された。果して氏の言はれた如くであれば、その書辭の如き新国造設置論を信奉して、新国造の設置時期や歌筆等に關して「あらゆる推斷臆説を逞しくした無稽の如き、忽ち存在價值を失ふべき塵命に直面し、今更、新野氏の高教に御答へするどころではないといふことにならう。併し、私をして忌憚なく言はしむれば、梅田氏の此の度の論文は、その壯図にもかゝらず、成功を収めてゐないと思ふ。即ち、新国造設置論は依然として成立し得ると思ふのである。

もとゞ、私が旧稿を草した際には、前述の如く、津田、植松両氏の新国造設置論を、その細部はとにかくとして大綱に於いては承認し得ると信じたのである。——この点も現在でも変わらない——、取てその論據について筆を及ぼすことを省略した。また、註として新野氏の論文にも新国造設置論の論據が掲げられてゐるが、これにも言及し得なかつた。そこで此の機会に、梅田氏の新説に服し得ざる所以を明ら

にすると共に、その過程を通じて、この向題に關する私見を——上記三氏の所説を讀みつゞ——まとめ置き度いと思ふ。同時に懸案であつた新野氏の高教にも御答へして、責めを果し度いと思ふのである。以下の文中、大化改新後の一國一貢の国造を、しはく「新国造」と略称し、新国造設置論を、梅田氏の新説に對する限り、旧説と略称することと御許し頂き度い。

Ⅰ 新国造制の存否

1

便宜上、梅田氏の新説に對する批判といふ形で論を進め度い。梅田氏は「たゞ新国造なるものが架空的存在に過ぎないことを知つて、關係史料に對すれば、刃を渡へて解くるが如く然りである」と前置きされた上で、關係史料についての検討を列挙し、次の如く結論された。

要するに、孝德天皇より大室令施行に至るまでの国造は、何れも皆上代以来の傳統的国造(註略)であつて、天武朝に更定された一國一貢国造などといふものはなく、その地位は、官制的地位に非

ずして、名譽待遇的職位であり、一國一貢の場合でも選致せらるゝは、その本質たる郡の郡領に止まつた。これに与へられた公的職掌口、臨時諸國の大坂に當つて破へつ物を出し(註略)、その行事に參與し、又恒例・臨時の祭祀による全国的班弊に當つてその事務に預ることであつたといふことができる。しかも、後世まで終に國造の全く存しない國もあつたのである。

そして、氏の新説の出現によつて、「一大虚に吠えて萬丈膏を傳へた一國一貢の新國造なるもの」は、朝敵に照らされた薄霜の如く消滅したと言はなければならぬといふと揚言されたのである。

併し、今梅田氏の新説を拜見して、最も不思議に思はれるのは、旧説を「全く架空の説」として斥け、新説を立てんとされるのなら、先づその為の用意として、旧説の論據とする史を全面的に批判して、その非なる所以を明らかにするか、或ひは、より有利なる史料解釈の別に存し得ることを論すべきであるにもかゝらず、その史が着しく不十分であるといふことである。勿論、氏の行文中には自づと旧説の論據に對する批判も現はれてゐるが、それは一部

分であつて、全てを盡してゐない。この史は、氏の新説の價値を減じ、その説得力を弱めるものと言はなければならぬ。

この史を念頭に置けば、梅田氏説に對する批判の方法として口、氏の論文の主眼をなす個々の史料解釈について批判を行ふ前に、旧説の論據の中、氏の言及の對象とならなかつたものについて、梅田氏の立場よりの解釈困難なる所以を明らかにすることは極めて有効な方法であらう。そこで先づその史を論じ、ついで、氏の史料解釈についての批判を行ふこととし度い。なほ津田・植松・新野氏らの論據とされるところは、便宜上、以下の敘述中に必要に応じて何らかの形で挙げ盡くすこととしよう。

2

梅田氏の言及されなかつた旧説の論據口、実は津田博士説の論據の主要史であり、植松氏も重ねて論據の一部とされた史である。それは概括して言へば、主として続日本紀に散見する國造に關する記載が、大化以後に於ける一國一貢の新しき國造制の成立を予想せざれば難いといふ史にある。さう考へば

るを得ない理由の一つは、例へば慶應三年十月條に「摂津国造凡河内忌寸石麻呂」なる記載が見えてゐるが、かくの如く国造が国郡制下の国名を冠して呼ばれ、しかも、この摂津は大化以後の国郡制置後のものであつから、この国造は大化以後の新置と考へざるを得ない、といふ事である。そして、同様の例は他にも二・三存する。これに対して、梅田氏は如何に解されるのであろうか。氏の論文に於ける他の史料解釈の例より推せば、恐らく「摂津に所在する国造」と解する外はないであらう。併し、「諸国々造」の如き記載ならば、或ひは「諸国に所在する多くの国造」と解する可能性もあらうが、「摂津国造凡河内忌寸石麻呂」と、官名乃至地位の如き官書として記載された場合にも、なほ同様に解し得るであらうか。それより「摂津国造」なる国郡制下の一国に一員の新しい国造制が存在して、その任にある凡河内忌寸石麻呂と解する方が、より明快であるまいか。併し、この場合には、たゞ、当時摂津職管内に「上代以来の傳統的国造」が一員となつてゐた事にそのやうな表現をとることが可能であつた、と言はれるかも知れない。然らば、延暦七年六月條に見えろ「美作

備前二国国造……和気朝臣清麻呂」の場合如何に解せられるであらうか。これも梅田氏流に解すれば、「美作・備前二国に所在する上代以来の傳統的国造たる和気清麻呂」と解せざるを得ないと思ふが何の必要があつて美作・備前の二国を提出するのであろうか、甚だ解し難いことになると思ふ。それより「一国一員の新国造たる美作国造と備前国造とを兼ねてゐる和気清麻呂」と解するか、或ひは、當時既に新国造制度が衰退期に入つてゐると思つて、この場合は美作・備前の二国に一員の国造が置かれてゐた——美作国は和銅六年に備前国より分割されたのであつから、この美作国分割以前の新国造が名目的或ひは形式的に遺存したと考へべき可能性がある——と解する方が、やはり明快であらう。といふより、それ以外には解しやうがないのであつたまいか。また、天平宝字元年閏八月條には「吉備国造」なるものが見えてゐる。当時、吉備国なるもの、存しなかつたこと、周知の通りであり、それ共に旧説の剛に於いても説明を要すべき事例となつてゐるが、併し、これも却つて大化後一国一員の国造制の存在を推知せしめる材料にこそなれ、梅田氏の立場からは

全く解し難いと思ふ。即ち天平宝字元年当時に「吉備国に所在する上代以来の傳統的国造」などといふことはあり得ないからである。これに対しては、或ひは大化以前からの「吉備国造」の名称がそのまゝ残つたのであらう。と反論されるかも知れないが、この名称は、津田博士の言はれる如く、記紀の吉備臣または上道臣・下道臣などの系譜を記してあるところには一度も現はれてゐないのを見ると、古くからの名称とは考へ難く、大化後、吉備国が一国であつた時代（天武元年紀・同八年紀に吉備国が見えう）に新置され、その名が天平宝字の頃まで残つたと解する方がよいと思ふ。⁽⁴⁾

次にもう一つの理由としては、国造が特に任命せられる地位であつたことが知られる、ということである。前掲の「吉備国造」もさうであるが、外に例をあげれば、神護景雲元年十二月條に武藏国足立郡の人太部直不破麻呂に姓を武藏宿禰と賜はり、ついで「爲武藏国々造」したことが見えて居り、また、延暦二年十二月條には、阿波国人粟凡直豊穗と飛騨国人飛騨国造祖門とを何れも「任国造」したことが見えてゐる。その外、同様の事例は幾つか指摘し得

るのである。これに対して梅田氏はどのやうに解されるであらうか。氏の立場から言へば「武藏宿禰へ旧太部直」不破麻呂を武藏国に所在する上代以来の傳統的国造となす」とか、或ひは「粟凡直豊穗と飛騨国造祖門とを上代以来の傳統的国造に任する」といふ風に解する外はないであらう。併し、先づ後者から言へば、豊穗及び祖門はその氏姓から推して、それこそ改新前の国造氏の子孫と考へられるのであつて、氏の所謂「上代以来の傳統的国造」に外ならないであらう。とすれば、これらを改めて任命するまでもないことであらう。前者の場合は、不破麻呂は国造氏の子孫か否かは秘密には不明であるが、⁽⁵⁾もし、津田氏や新野氏の如く国造氏に非ずと考定し得るとすれば、これを今更「上代以来の傳統的国造」に任命するといふことは如何なることであらうか。また、特に「武藏国の国造」とその所在国名を指定する必要は全く無いことではないか。また、もし不破麻呂が国造氏の出身ならば、前述の批判を適用すべきことと言ふまでもない。結局、これらもやはり武藏・阿波・飛騨の各国に一貫するの新国造制があり、その新国造に任じた記事と見る方が、より明快であ

らう。

以上の如く、続紀に散見する「国造」に關する史料には、梅田氏の立場から如何にも解し難く、新国造制の成立と背景において考へれば解し易いものが多いのである。この点に對し、梅田氏は、以上の例は何れも奈良時代の例であつて、「孝德天皇より大宝令施行に至るまでの国造」には適用し難いと言はれるかも知れない。併し、旧説の主張者も、その点と看過してゐる訳ではないのであつて、例へば津田博士も「持統朝・文武朝ころも奈良朝と同様であつたと推測して大過は無からう」といふ立場に立つて居られるのである。私は、奈良時代の国造は既にその実質を失つたものであらうと思つてゐるが、併し、この時代の史料を通じて知られる新国造制度そのものは、奈良時代以前のもので遺存したものと考へて差支へないと思ふ。従つて、梅田氏の説は、かゝる新国造制度が奈良時代以降にあらためて成立したと考へられざる限り、前述の如き重大な難点を有してゐると言はざるを得ないのである。

3

次に、梅田氏の掲げられた史料解釈が果して妥當なものであるか否かを検討して見度い。たゞし、それらの史料解釈は、その全てを特に積極的に旧説の論據を導ひ、また、積極的に氏の新説を支へる論據として居られる訳ではないので、此処では、積極性のある史料解釈のみをえらんで検討すれば事足りやう。以下の史料番号は梅田氏の番号である。

② 斉明紀五年豐歲條

命出雲国造磯修嚴神之宮。

この條に關連して、「出雲は當時の前後を通じておのづから一國一國造になつてゐたに過ぎない。同様おのづから一國一國造になつてゐた所は、頗る多く、全六十余國中五十數國に及んでゐる」(「當時の前後を通じて」とは⑤によると「大化の新制の前後を通じて」の意であることが知られる)と言はれるが、これに到底信じ難いことである。改新の前後を通じて国造が一國一貢であつたといふことは、例へば出雲國などの場合に言ひ得ることである。私も前稿の註8に於いて述べたことがある。併し、それは出雲國には改新前に他に国造の存した形跡も見えないので、国造所管國が殆どそのまゝ国郡制下の國に

移行した——改新前の出雲国造の所管国は他の一般の国造所管国より広大であつた——と考へられるといふ理解に立つてのことである。一般に改新前の国造所管国は国郡制下の郡に移行した筈であるから、改新の前後を通じて国郡制下の一国の範囲内に一人の国造が存した国が五十数面に及ぶとは考へられぬ。梅田氏のこの考へ方は、氏の改新後国造観に於いては重要な意義を持つらしいことが、全般の行文中より察せられるが、それだけに具体的な証拠を挙示されることなしにかく言はれるのは納得し難い。

④天武紀五年八月辛亥條

詔曰、四方爲大解除、用物則國別國造輸拔柱、馬一匹、布一常、以外郡司、各刀一口、鹿皮一張、鑊一口、刀エ一口、鎌一口、矢一具、稻一束、且留戸、麻一條。

⑤神皇正統記大統系

凡諸國貢大被褥、每郡、出カ一口、皮一張、鐵一口、及雜物等戶別、麻一條、其國造出馬一疋。この中④は植松氏の説に於いては、一国一貢制国造の論據の一つとなつてゐる。植松氏がこれを論據と

されるのは「国別国造」と「馬一匹布一常」といふ表現にあるやうである。これに対し、梅田氏は「新国造設置論者曰く『国別の国造』と訓み度いかも知れないが、『以外の郡司』と相対して用ひられてゐる以上『国別に』と仰るべきであり、国造は国造たる郡司、以外郡司は国造たらざる郡司の意である、とされる。この中で『国別に』と切つて訓むべきことは恐らく梅田氏の言はれる通りであらう、併し、そのことを認めても、植松氏の論據が否定し去られたことにはなるまい。植松氏の表現は簡潔なので、これを更に私の考へによつて敷衍して見よう。

先づ、この詔は国を單位として大被が行はれ、その甲物が備進さるべきことを前提としたものなることは疑のないところであらう。その際、郡司については「各」、庶民へ具体的に戸主について「每戸」の如く、複数の表現をとり、一国内に於ける郡司及び戸主が決して軍数ではあり得ない事実に対応せしめてゐる。これに反し、国造に關しては、そのやうな表現もなく、国造が一国に一員であることを當然のこととした表現と見做さざるを得ないのである。この点に關して梅田氏は如何に解せられるの

であらうか。

右の論点は②についても同様である。②に於いて「毎郡」、「戸別」とやはり郡司や戸主に對しては複数の表現をとり、国造に關してのみその配慮がない。この令文は天武五年の詔文とは内容及び體文の上に相違が見られるが、それでも右に述べた點は一瞥して変らない表現上の特徴である。この令文について梅田氏は、「毎郡」出す物を定め、「戸別に」出すことと口決してない」のであつて、「其国造」とは「其郡の国造」の意」とされるが、これはいさゝか捉はれた一方的な解釈であらう。この條文全体が国を單位とした規定であることを忘却すべきではあるまい。この點を念頭に置けば、「其国造」は「其の郡の国造」ではなく、「其の國の国造」の意と解する方が自然と思はれる。そして、その「馬一匹」の表現は、やはり一國一貢の国造の存在を予想せざるを得ないのである。

たゞ、④の「以外郡司」の意味に疑念の残ることは否定出来ない。例へば、津田博士は「郡司たる国造」と「国造ならぬ郡司」とを別記したものの如しと見て居られるが、これは郡司中の一員が必ず国造

を兼任するといふ建前を前提としなければならぬ。併し、延暦十七年三月廿九日の太政官符に「昔有国造郡領職貢有別。各守其任不致違越」と見ゆる處は、博士の説明にも拘らず、やはり不利な史料とならう。また、植松氏は「国造以外の郡司」といふ簡單な意味と解すべきであらうとされ、かゝる表現を用ひた理由は、恐らく国造も郡司も同一の氏から任せられるものであつたからであらうかと説明しておられる。私自身として「以外」に「訓むべきではないかと考へてゐるが、此処の訓み方及び意義が如何やうであらうとも（梅田氏の場合は津田博士と同じである）一國一貢の新国造制の存在の推定は、これとかが、はりなく主張し得ると思ふのである。

⑨持統紀六年三月壬午條

賜所置神郡及伊賀伊勢志摩国造等冠位。

梅田氏は「神郡及伊賀伊勢志摩国造」と「多氣・度会の二神郡及び伊賀・伊勢・志摩に所在する諸国造」の意とされ、そのことは「神郡（の国造）」とつづけて用ひられてゐることによつても明らかと言はれる。即ち、神郡といふ地域を示す語とならべて伊賀・伊勢・志摩等の国名が併記されてゐるこ

とを特に重要視される様であるが、この事は何れ氏の解を積極的に支持する程のものではない。見方によつてはむしろその逆ですらあると思ふ。当時、神郡の郡司は特に「神郡国造」と呼ばれてゐた（梅田氏前掲論文参照）。即ち多氣・度会二神郡の郡司と伊賀・伊勢・志摩三国の国造とが、何れも「国造」とよばれるものであつたから、このやうに省略した形で記載されたと解して差支へないと思ふ。従つて二神郡の郡司と三国の新国造といふ意味に解して何も差支へない。むしろ梅田氏の如く解する處には、「神郡及伊賀伊勢志摩国々造」とあつた方が良く、更に言へば、この神郡は伊勢国内のものであるからこの三国の「上代以来の傳統の国造」を対象としてのことなら、單に「伊賀伊勢志摩国々造」と言へばそれで済むことであらうまいか。

⑭神祇令集解諸国大夜條

。六云、（中略）国造、国別有耳、若国造關者、無馬也、古説、不依、以官物買出、国造兼任郡司者、刀等並通備耳、（下略）

。先云、（中略）国造、任郡司、無国造者、郡司兼亦出馬耳、若專無国造者、不出馬也、国造、

謂官之名耳、毎国一人可有者、（下略）

六説の「国造国別有耳」は虚心に読めば、国毎に一員の国造あり、の意であらう。徳松氏及び新野氏が論據の一部とされる所以下である。梅田氏はことさうにこれを「国毎に所在する多くの国造有り」の意とされるが、これだけの意味しかないのなら、この一句はむしろ不必要な句である。この解釈などはむしろ梅田氏の方がとらはれてゐる感がある。また「若国造關者」について「郡の中にも国造なきものもあることを示し」と解されるのは、前述の如くこの大夜條に「毎郡」とあり、「其国造」が「其の郡の国造」の意なりと解せられることからの帰結であらうが、その裏の從ひ難いことは既述の通りである。従つて、此処は、国の中には国造なきものもあることを示すに過ぎないのであつて、「一國一員の国造」などは考の中に無いなどとは到底断言出来ないと思ふ。また、古説に「国造兼任郡司者」とあることが、まずく梅田氏の所説を明らかにすると言はれるが、これは特に關係のないことであつて、何故に特に言及されるのか諒解に苦しむところである。

次に、先説について考へよう。梅田氏は「国造任

郡司……不可出馬也」の部分について、「国造は往々にして郡司を兼ねてゐる。しかし、国造が居てもたまたま郡司になつてゐないところは、その国造所在の郡の郡司になつたものが、代つて馬を出し、又もともと国造たる者の存在しない郡であれば、初めから馬を出すことは不要である」との意味とし、「委細を尽した明解」とされるが、この解説には充分無理があらう。就中「無国造者」と「国造が居ても、たまたま郡司になつてゐないところ」と解されるが如き、それである。これは「国造が郡司に任命されて、その爲に丁度大坂の時にたま／＼国造が歿すとなつてゐる国は、その郡司になつた旧国造が郡司として出すべきもの、外に、国造分として馬一匹を出すべきである。もし、さういふ臨時の歿すでなく、国造そのものが無い国は、馬を出す必要がない」といふ意に解する方が妥当であつて、国造が郡司に任せられた場合に歿すを生ずるといふのであれば、「新国造のことなど片鱗をも示してゐない」ところか、むしろ国造が一國一員であつたことを示してゐるとさへ言へよう。併し、この実は旧説が特に論據としてゐる訳でもないから、これ以上は論ずるつもりは

ない。

右の文の如くに、国造を「毎國一人可有」と記してあるが、これも梅松氏及び新野氏の論據の一つとされる處である。しかるにこの句について梅田氏は、「何を根據としてのことか、妄説である」とされるが、明法説をそれほど簡単に妄説視されるは如何であらうか。勿論、Ⅱで述べたやうに、私自身選敘令郡司條集解の明法説がその條の「国造」を新国造としてゐることは、法意を誤つてゐると解してゐる位であるから、明法説が常に正しく従ふべきものであるなど言ふつもりはない。しかし、もしこれが妄説なら、何故に明法説がかかる誤りをおかしたか、といふ點にまで説き及んでこそ、じめて説得力を持つと思ふが如何であらうか。また、同じ先説に因して、その前半については曲解した上で明解と賞讃し、後半については妄説といふのでは、すこし勝手に過ぎる史料解釈と評せざるを得ないのである。

⑮選敘令集解郡司條

古記云、先取国造、謂似可被給国造之人、所管国内不限本郡、非本郡任意補任、以外、雖国造氏不合、而、不在父祖所任之郡、若為任意補任

答、国造者一国之内長、應下於国司、郡別給国
造田、所以任意補充耳、(中略)

・跡云、国造、謂見任国造人也、

・宋云、(中略)国造、謂毎国可有一人者、未知
常定成氏不有否、答、

先づ、古記説から述べるに、この古記の記載は(a)
「可被給国造之人」の部分、及び(b)「国造一国之内
長應任於国司……」の部分の訓み方、従つて意味の
とり方が困難なものであるが、梅田氏は(a)を「国造
を給せらるべき人」と訓み、これにつづく部分は「
一国内で甲郡の国造を乙郡の国司に任じてよいが、
他国の郡司に任ずることは不可である」の意である
とされた。併し、此処で問題なのは、新野氏の最近
指摘された如く、「所管国内」の一句である。この
「所管」は前後の文章より見て、国造の所管と解せ
ざるを得ない。そしてその後の「国内」口、下文に
「本郡」等の文字のある以上、国郡制下の一国たる
こと明白である。即ち、国造が国郡制下の一国を管
してゐることを背景としてゐるのであつて、その故
にこそ、その国造の出身の郡以外でも郡司になり得
る、といふ説明である。梅田氏の如く簡単に「一

国内」などと片附け得るものでない。従つて、こ
の史料は氏の提説とは併に一国一貢の新国造制の存
在を示すものに外ならない。

尚、新野氏は、特にこの古記によつて「国造之人」
と「国造氏」との対比を強調して、論據の一つとし
ておられることを述べて置かう。これは(b)を「給せ
らる可き国造の人」と訓み、跡記の「見任国造人」
と同義と見られた為である。この(b)の訓み方にはど
うも疑問が残るが、^(?) かつて私は梅田氏と同じ訓み
方をして見たことがあるが、これも現在では妄当で
ないと思つてゐる。この点もⅡで後述の予定――
しかし「国造の人」に給せらるべし」と訓んでも良い
訳であつて、何れにせよ、新野氏流に「国造之人」
の四字は切り離さない方が良いと思ふ。即ち、跡説
の「見任国造人」と同様の筆法であらう。そして新
野氏は此の「国造之人」以外に「国造氏」と雖もこ
の條の適用範圍外である、の意に解して居られる。
そこで新野氏に従へば、古記の文意は、大略「この
條の国造とは一国一貢の新国造である。その新国造
所管の国内なら、出身郡以外の郡領に任じてよい
しかし、この新国造以外の人口、たとへば新前より

の傳統的国造氏であつても、郡邊執任の優先权はないといふことにならう。即ち、(a)の訓み方の外に「以外」の意味のとり方が梅田氏とは全く異なるのである。この何れが是か私に口供かに決し難く、両氏の御教示を賜り度いところであるが、その何れにせよ、「所管国内」の一句によつて、古記が一国一員の新国造を対象として文をなしてゐることだけは明白であらう。

次に(b)の部分について、梅田氏は「国造は一国の内長にして、国司に適任す。郡別に国造田を給す。所以に任意に補充す」と読んで、これは事實と違つてゐると言ひける。中央出身の国司と地方出身の郡司との相違は、大化以来の律令地方政治の根本となすものであり、勿論古記作者の熟知するところに相違ない。従つて古記作者が、国造を国司に適任すると考へることなどはあり得ないのであつて、梅田氏は古記が事實と違つてゐると批評する前に、自らの読み方の方こそ反省さるべきであらう。植松氏が「適任於国司」と「適任於国造」の誤りと解されたのもその為であつて、これを知らねばならぬ。植松氏はこの部分と「国造は一国の内長であつて、適々国

造に任せらる」と郡別に国造田を給せられる」の意に読み、「国造は国司の治める国に設けられるものであつたと解さねばならぬ」として、新国造制設置論の論據の一つとして居られるのである。

ところで、この植松氏の読み方には新野氏の批判がある。それは「内長」とは何のことか全く不明確であるとし、此処は「国造は一国の内の長じたる、適々国司に於て任す……」(前には「……長じたるを適々国司より任じ……」)と訓まれたが大差はないと訓んで、新国造の任用規定であると考へられた。「適任於国司」の部分には「於」字の存することを考へると、新野氏の読み方が妥当と思はれるが、假りに植松氏のまゝでも、少くとも梅田氏の読み方よりすぐれてゐることは言ふまでもない。また、新野氏の訓み方に従つても、「一國」を当然国郡制下の國と解す可き矣と變らないのであるから、これを旧説の論據となし得る矣は凡てゐないのであつて、新野氏もまたその奥まで批判された訳ではない。また、梅田氏が「国造は『一國の内長』であるのは出雲国造の如く、たまたま一國一國造の如き場合には、言ひ得るとしても」と言ひけるが、これは遂に

言へば、一般的にはさう言へない、といふことであらう。此処でも氏は⑭の先説に對すると同じく、古記の前半について口「竹管国内」の一句を無視して氏の立場より明解とし、後半を氏の立場より批判否定するといふ、すこしく身勝手な史料解釈を行つてゐると評せざるを得ないのを遺憾とする。

なほ朱説に「毎国可有一人看」とある處も、植松新野西氏によつて論據の一つとされた處であるが、植田氏は、此處に「答」とあつて、その内容のないことを「これは脱文ではなく、答に窮してそのまゝにされたものであらう」として、朱説全体を否認する態度を取つて居られる。勿論、一般に朱説なるものの史料価値に疑問の存することは認めらるゝに各でないが、集解に錯簡、誤字、脱文等が多くて、今日史家を悩ましてゐることを承知の上でかく言はれるのなら、それは武断に過ぎると言わなければならぬといふ。

以上は、植田氏の論文の主眼をなす「大化二年以後、大室二年に至る間の国造に關する史料」と「大室（善志）令の關係規定」についての史料解釈について

いての検討であるが、なほ此の外に、氏の掲げられた史料解釈に延喜式がある。

延喜民部式下大坂馬條

凡諸国大坂馬、若無国造国看、以正税實用。其價不得過五十束。但大宰府及肥前肥後日向並以牧馬充之。

これについて、植田氏は「今假にこの『国造』を新国造とし、且つそのこれ無き国があるとせんか、一國一員新国造説は、自家撞着、全く崩壊してしまふのである」と、あたかも旧説に止めを刺し得たかの如く言はれるのであるが、これは全く思ひがけぬことであつて、何故に旧説が自家撞着するのかわかり解に苦しむと言はざるを得ない。この式文が延喜式で新たに立てられたものか、それとも先行の貞觀式或ひ弘仁式から受け継がれたものであるかは不明であるが、何れにせよ、この規定は新国造制實施期のものと考へることは差支へない。その時代に新国造無き国の存することは、敢て異とするに足りないであらう。旧説の主張が、誰一人として、新国造制度が延喜の頃まで、いや、もつと遡つて平安初頭まででも、整々續々と實施されたなどとは言つて居

ないのである。

4

以上、梅田氏の新説に対し、直接、旧説の存立にかゝりある点だけを問題として論じまつた。その他にも尚論じ残した点もあるが、概して言へば、梅田氏の史料解釈は如何にも武断に過ぎるという印象を拒み得ない。⁽⁹⁾勿論、史料の乏しい古代史の問題に相反する史料解釈の存し得る余地のあることは十分承知してゐる。また、梅田氏の附記によれば、氏の此の度の論文は「一先づ總論的敘述をまとめるに止めた」ものであつて、「各論として各國の国造を具體的に論じ、諸種の問題に觸れつゝ、趣旨を徹底せしむべきである」といふことなので、その各論の公にされた日には、本稿で述べた批判の如き、敢て向題とするに足りないといふことになるかも知れない。私口旧説の崩壊を惜しむものではなく、況んや殊更な論争を好むものでない。併し、現在の段階で口・直感下う折角の新説に服し得ざること、上未述べまつた通りである。

最後に新国造設置論を信する一人として、私の

納得し得る論據をまとめて置かう。

- (1) 統紀以下の国史に散見する国造が、国郡制下の国名(その中には大化以後のものが見られる)を冠して呼ばれる、且つ、その地位口特に任命さるべきものであつたこと、そして此のことは、奈良朝以前に遡ると考へて差支へないこと、
- (2) 大解除用物に關する天武五年詔及び神祇令諸国大祓條が、何れも国を單位として規定され、郡司及び戸主には複数の表現をとつてゐるにも拘はらず、国造には單数の表現をとつてゐること、
- (3) 選敎令集解郡司條の古記に、国造に關して「所管国内不限本部……」とか「一国内長……」郡別給国造田などあつて、国造が国郡制下の一国を管する、或ひは一国内から一人えらばれる、と解すべきこと、
- (4) 「国造、国別有耳」(神祇令集解諸国)、「国造、謂官之名耳、毎国一人可有者」(類社)、「国造、謂毎国可有一人者」(禮敎令集解郡)等の直接そのことを主張する史料の存すること、

II 選教令郡司條に見える「国造」

1

1に於いて梅田氏の新説批判といふ形で、新国造設置論はなほ依然として成立し得る所以をほゞ明らかにし得たと信するので、次に新野氏の高教に御答へし度い。

はしがきでも述べて置いたやうに、前稿で私が向題としたのは、新国造制の成立の時期とその職掌との二点であつた。そして、前者については新野氏も目や同じ意見であるが、後者については相違がある。併し、その相違は新野氏も「本質的見解の対立を持つものでない」(朝鮮社「史蹟」と述べて居られることでもあり、もと／＼史料の少い向題で、多くの推断を容れる余地のあるものであるから、私自身、自説を撤回する必要はないと思ふと同時に、それ以上で固執する意志もないので、此處で再び論じようとは思はない。たゞ、選教令郡司條に見える「国造」をめぐる解釈の相違は、單に新国造制についてののみならず、郡司制度自体についての向題でもあるから、是非論じて置き度い。念のため、本條を掲げると次の如くである。

凡郡司、取性識清廉、堪時務者、爲大領少領。強幹聰敏工書計者、爲主政主張。其大領外從八位上、少領外從八位下敘之。其大領少領、大目司者、先取司造。

私は前稿に於いて、この注文に見へる「国造」を大化改新前からの地方豪族の汎称、即ち大化改新詔に見える「国造」と同義と見、従つて、新国造制と無縁のものとの見るべきが故に、この「国造」を新国造と解する集解諸説を法意を誤つたものと解して、その根據の一・二を簡単に註記して置いた。これに対し、新野氏はこの「国造」を集解諸説通り新国造と解し、新国造の特権の一部たる郡領優先任用权を示すものと理解されたので、最近の論文に於いて詳細に私見を批判され、また「学界動向」に於いても「私(新野氏)の論が正しいものとしてよさうである」と述べられた。氏の御批判により、私見の根據とするところには、確かに後述の如く反省す可く、また訂正を要すべき處が認められ、その處について氏は御叱正を感謝しなければならぬ。併し、にもかゝらず、郡司條の解釈自体について口實を作ら依然として旧見を變更する必要を認め得ないので、

その然る所以を以下に開陳し度い。たゞし、前稿に於いては、特にとり立てゝこの点と詳論した訳で口なく、その根據としてあげたところも却つて未梢的なものであつた爲に、新野氏の理解と傳へられなかつた感みもあるので、本稿では、たゞ單に新野氏の批判に一々御答へして旧見を擁護しやうといふのではなく、更にすこし論点を拡大して改めて氏の高教を乞ひ度いと思ふのである。

なほ、以下の議論を簡潔にする爲、次の諸点をあらかじめ断つて置き度い。

「大室選教令郡司條は舊志令のそれとほゞ同文の冠位名に相違があつたと思ふ」・同條裁へ「其大領少領……」がやはり注文であつたと思ふのであつて、少くとも中心的な大綱に於いては変化はないと解する。

(二) この令文に先立つて、改新詔の「郡司並取國造性藏清藤原時務者、爲大領少領」・強幹肥後工書宇者、爲主政主張」の如き規定へそれが改新詔の原文を傳へたものであるにせよ、或ひは近江令又は淨御原令よりの転載であるにせよが存し、その規定を変更して大室・養老令文が成立したと考へ

ざるを得ないが、その時期は不明なので、たゞ変更の存したこと大を問題にする。

(三) 右の変更は於いては郡領に拘する限り、規定の表面上、「國造」や「主兼」の変更が見られるが、その「國造」や「主兼」の変更が見られるが、その「國造」は特に一々言及の対象としない。即ち、法意に変更があつたか否かを問題にする時には、右の事は承知の上で、「國造」の意味に変化があつたか否かといふ点だけを問題にする。

2

先づ、行論の便宜上、私が前稿で述べたところを整理して置かう。

(1) この「國造」を義解も集解諸説も新國造の意に解してゐるが、それは無理な点があるやうに思はれる。

(2) その理由は、(a) 一國教郡の太少領を兼任するのに一國一負の國造より任命するといふ点、(b) 天武十二年正月丙午詔の「諸國司國造郡司及百姓等」の順序、などである。

(3) 古記の「可被給國造之人」と「國造を給せらる

べき人」と読み得るならば、古記のこの解釈は右の難点を打開せんとした窮余の一策とも見らる。従つて私は、これら明法家の解釈を神祇令の「国造」の語義（新国造）との統一を求めた、あまりにも文字にとらわれた解釈と思ふ。

(5) 尤もかく解すれば、神祇令と饗餼令とは同じ「国造」の語義が異なることとなり、いさゝか不整一に過ぎる如くであるが、(a)前者は本文、後者は注文といふ別もあり、(b)後者は太化二年詔又はその成文化せるものとしての近江令からの流例に従つての用語法であると考えれば、さほど気にすることはない。

(6) むしろ、卷を異にする令の用語例にそれ程厳密な統一性を期待すべきではないからう。

以上が、前稿で私の述べたところであるが、この中、新野氏の御批判によつて反省の結果、撤回し、或いは特に積極的に挙示する意志を放棄してもよいと思ふ處を先づ掲げることにする。

そのア一は(3)である。私が「国造」を拾せらるべき人しと読み得るならば、と言つたのは、「新国造」に任命されるべき資格ある人し即ち新野氏の所謂「国

造氏」と解し得るならば、——このことの背景には言ふまでもなく新国造は旧国造族から任命されるのを慣例としたといふ理解がある——といふ意味である。併し、これは明らかに失策であつた。この後に就けて「所管国内……」の語がある以上、新野氏の指摘によつて「」に於いて述べた如く、古記の言ふ「国造」が新国造であることは明らかであるから、古記は兼解及び他の集解諸説と同じく「国造」は新国造と解してゐると考へざるを得ない。従つて、古記の文章の中に窮余の一策とも見るべきものを求めんとすることは有害無用のことであつて、「所管国内云々」の文字を見落したことは不明の至りであつた。よつて、前稿中(3)の部分は撤回し度いと思ふ。

そのア二は(5)の(a)である。これに対して氏は饗餼令部司條の「国造」の部分に、形は注文であつても、實質は本文であると反論された。一般に令の注文が本文と同一の價值を有するものであることは、多言を要しない。にもかゝらず敢て私が此の處に言及したのは、この條の立法の趣旨についての坂本太郎博士の説を念頭に置いてゐるからである。即ち、博士の言はれる如く、この條の主眼は本文よりむしろ

注文に存し、本文はその為の前段に過ぎないと思ふからである。従つて、この注文は、本文に対する附加的・制限的・例外的規定といふ注文の一般的性質と異つて、むしろ本文を否定する性質を帯びてゐると言へやう。この様な注文の中に出て来る「国造」と神祇令太政官の本文の中に出て来る「国造」とが同義でなくとも「さほど契にする必要はない」と考へたのである。更に言へば、かゝる特殊な性質を持つた注文の形であつたればこそ、(5)の(6)に述べた如き可能性が想定され易いと思へたのである。大体以上の如き意味で言及したのであつた。従つて、以上の如き説明なしに言及したことの不用意と、表現の適切ならざりしとは認めざるを得ないし、また、その程度のことなら敢て言及の要なしといふのであれば、これも亦た撤回して差支へない。

その(3)は(2)の(6)である。これに対し氏は「これは職掌上の所任からなされた配列であるに過ぎぬから、太宰府の主神が多瀬島の島守なり、神祇伯が中納言を経て太納言に移る様なことで、格別不思議なことでない」と反論された。私はこの順序を單に「職掌上の所任からなされた配列」とは考へ得ない。

やはり一国内に於ける身分の序列を示すと思つてゐる。併し、これは別に證據があつてのことでもないから、この点と積極的に云々することは差控へた方がよいかも知れない。即ち、新野氏の立場から見ても「格別不思議なことではない」とは認めるに吝がでない。

以上、三案にわたつて述べたが、その結果、前稿に於ける私見の根據は、積極的に(1)の(1)、消極的に(1)の(6)のみとなつた。この中、(5)の(6)は新野氏の見解と私見との間に相違を生ぜしめた立場そのものの相違なので、その可否は後述に俟ち、此處では、取り敢へず(2)の(6)について再説敷衍して置き度い。

ところで、この点については、格別、新野氏の御批判も頂かなかつたが、私はやはり看過すべからざる点であらうと思つてゐる。恐らく新野氏の考へられるところは、郡領に政官の生ずるにつれて、その補充の必要のある度毎に「国造」が優先的に郡領に任命されてゆくのであらうから、この「国造」を一國一員の国造と解しても何の不思議もない、といふことであらうと思ふ。併し、私見によれば、この規定

口郡領の一般的な任用資格を規定してゐると解す可
きであつて、極端な場合を假定して尋へば、同一国
内に於いて郡領の政官が同時に多数主じてゐても、或は
は新たに同時に教郡が設置されても、差支へない規
定と考へねばならぬと思ふ。即ち、郡領補充の際
の條件ではなく、一般的な郡領の補任資格を規定し
たものと思ふのである。——古記には「補充」の語が
見えろが、これは現代語の補充と同義ではないやう
である。また、同義であつたとしても、古記の立場
からは当然の用語法で、これに拘はる必要はない。
従つて、必ず複数の定員を有する郡領の補任資格と
して、軍教の新国造を挙げると言ふことはやはり考
へ難いと思ふのである。

3

次に翻つて、新野氏の主張を検討して見よう。今、
氏の主張を整理して見ると、

(i) 古記記載の検討によつて、大宝令施行時代から、
この「国造」は決して「改新前の国造景主等の地
方豪族の汎称」ではないことが明らかである。

(ii) 法文成立史的に言へば、当初に於いては、この

「国造」は旧国造族を指したであらうが、併し、
新国造成立後は古記の如く新国造を意味するもの
となつたのは当然であらう。

(iii) (a) 新国造制成立以前の法用語とそのまゝにして
置かれた背後には、そのまゝで矛盾なく不自由す
う感じがかつたといふ行政上の実態があつたに違
い無からうと思はれる。(b) そして古記の如き法條
解釈に依つて支障なく適用されたのであらう。

(iv) 段りに、それが「あまりにも文字にとらはれた
解釈」であつたにしろ、実際に然る法運用が行は
れてゐたのであらうならば、それを認める以外に如
何ともし難い。

およそ以上の如くであらう。

そこで先づ(i)であるが、なる程、古記の解釈につ
いては氏の言はれる通りであり、それに服すべきこ
とは前述の通りであるし、義解及び明法家の説がす
べて古記と同様であることは既に私も認めてゐると
ころである。併し、義解及び明法家の解釈が果して
法意の通りかどうかは、これと別問題と言はなければ
ならぬ。その政にこそ当面の向應が生ずる訳
であらう。勿論、古記が権威ある大宝令註釈書であ

「たつたうこの口、私も信するものである。併し、古記と雖も誤りなきを保し得ない。しかも、明法家の解釈に口、ともすれば令そのもの、不完全性と無視して理論に走る傾向の存することも見逃して以ならない。更に言へば、古記撰述時代とされる天平中葉に口、既に新国造制度は既に名目的なものに移行しつつあつたと思ふ。従つて、この古記の解釈は大宝令本来の法意とも、また天平当時の実状とも無関係に、單に神祇令の「国造」との関係から、理論的な説明を加へたと解し得る可能性が少くないのである。もとより外に特に問題とすべき点がないのなら、一般に古記の説を以て大宝令の法意を正しく傳へたものと見ることも許されるであらうが、この場合には後述する如き重大な問題がある。従つて、以上の如き観点から、必ずしも古記に拘束される必要はないと思ふ。また、義解は公定の註釈書であるから、その編纂は事実上の立法作業であり、その説は即ち法であるとも言へる。併し、本條に關する限り、その撰述年代を考慮すれば、古記の場合と同様の批評を下すことが可能であらう。

次に(II)であるが、これについて口、一般に「国造」

なる語が、新国造制成立後に於いてどのやうに用ひられてゐたかといふことを考へて見る必要がある。そして、それ以外ならぬ古記自体が物語つてゐることも言へやう。古記に於ける「国造之人」と「国造氏」の對比は新野氏の強調されることであるが、そのこと自体が、「国造」に新国造と旧来の地方豪族の汎稱との両義の存したことを物語つてゐる。併し、これは或ひは私的な慣用的な使用法に過ぎぬといふ反論もあらう。即ち、新国造制成立の「国造」は、少くとも公的には新国造以外を差すことはあり得ない。と、窮屈に考へれば確かにその通りでなければならぬ。私が明法家の解釈を「文字にとらはれた解釈」と評してゐるのも、実はかゝる融通のきかない觀念が当時の明法家にあつたものと想像してゐるからである。併し、私は公的な使用法に於ても「国造」に両義が認められてゐたと考へて良いと思ふ。その例證として「国造丁」なる用語を挙げることに出来やう。

この「国造丁」なる語は、周知の如く、萬葉集卷廿の所謂東国防人歌の左注に、防人の地位を示すと思はれる語として、「助丁」、「主帳丁」などと共

に見えてゐるものである。これらの語の意義については、従来種々言はれて来たが、最近、防人集團の組織編成といふ卓抜な觀察からなされた岸俊男氏の説が最も妥当なものであらう。即ち、氏に従へば、「国造丁」は防人に差入された丁男であり、各國に於ける防人集團の長たるものである。そして、大化前代の国造軍の體造が防人集團の編成に継承され、それが国造の制度上の改変や、律令的な軍制成立にもかかはらず、その後も置制として残り、その爲に防人集團の長に「国造丁」なる称呼が附せしめられてゐるのである、といふ。然る時は、この「国造丁」の語に見える「国造」は、旧地方豪族の汎称としての国造の意味で用ひられてゐるに外ならない。しかも、この「国造丁」が公的な防人の地位を示す用語であることは、「主帳丁」などの用語法を併せ考へれば、異論はないであらう。従つて、「国造」の語は、新国造制成立後に於いても、公的に、なほ旧地方豪族の汎称としての意味をも持つてゐる之言はなけりやうない。とすれば、太宰・善走の遷校令に此の意味に於いて「国造」の語が用ひられる可能性は存するのであつて、新国造の意味に於いて用ひら

れるのが当然、とのみは言ひ切れないのである。

次に(前)であるが、この中、(a)の部分については、私も別の意味で同感である。即ち、氏の考へられる「行政上の実態」は、(b)の部分から判断すると、新国造制成立後は郡領の任甲が一國一貫の新国造優先といふことに変つた、といふことであり、その故に「そのまゝで矛盾なく不自由すら感じなかつた」といふことであらう。しかし、私はさうは思はない。新国造制成立後も、郡領は旧地方豪族から任用されてゐたことこそ実態であり、その故にこそ旧来の用語と改訂しなかつたのだと思ふ。勿論、新国造と紛れ易い矣は確かに妥当でないが、旧来の地方豪族の汎称として適當なものを探われれば、以前から既にその意味で用ひまつた「国造」の語を襲用する以外には考へ難いものではあるまいか。従つて、(b)に述べられた如く、古記の如き法條解説に依つて支障なく適用されたとは考へ得ないのである。

最後に(iv)であるが、新野氏の言はれる如き法條用が實際に行はれてゐる事例、或ひは、そのやうに解さざるを得ない事例を、明法説以外に提示された上でかく言はれるのであれば、私もそれに従ふ外はな

い。たゞ、明法説のみから曰「實際に然る法運用が行はれてゐた」か否かは分らないのであつて、その奥こそ私の主張し度い中心奥なのである。

以上が、私見に対する批判といふ形で述べられた新野氏の主張に対する直接的な反批判である。概して言へば、新野氏は、明法説は法意を正しく傳へたものであると解し、此の奥から出發して、「国造」の新詔義の發生によつて神祇令詔国太政條の如き「国造」の用語法が令に用ひられ、また従つて郡領任用に關する法意も變化し、同時に郡領任用の実態も亦た變化した、と考へて居られる。これに対し私は「国造」の新詔義の發生によつて神祇令詔国太政條の如き「国造」の用語法が令に用ひられたにもか、はらず、郡領任用に關する法意は變らず、また、郡領任用の実態にも變化なく、従つて、明法説は法意を離れた「あまりにも文字にとらはれた解釈」と考へてゐることになる。新野氏の説は、「国造」の詔義の變化によつて、郡領任用の法意が變化したと見る奥が難奥であるが、併し、私の主張には明法説を完全に無視するといふ敗奥が存する。従つて、此の段階では、さきに再説した(2)の(a)を加へても私の主

張は新野氏の批判と少くとも同程度の根據を有するものとしか言へず、しかも両者の難奥、敗奥は相互に反比例する關係にあるので、このまゝでは結局水掛論に終るおそれがある。そこで私口、新野氏が言はれる如く「實際に然る法運用が行はれてゐた」かどうかを少し考へて見ることによつて、新しい論奥を附加し度いと思ふのである。

4

先づグラーに述べ度いと思ふのは、大宝令制定後に於ける郡領任用規定の變遷を示す史料に曰、全然新国造に対する配慮を見えないといふことである。新野氏は、古記に準據して大宝令施行時代に古記の述べらる如き法運用が實際に行はれてゐたことを推定して居られるのであるから、およそ古記の撰述年代と同時代の一例を掲げよう。それは天平二十一年二月の勅(続日本紀同月壬戌條)である。

眞年之間、補任郡領、国司先據譜要優劣、身文能不、賢甥之列、長幼之序、擬申於省、式部更問口狀、比較勝否、然後選任、或譜要雖輕以勞薦之、或家門雖重以拙却之、是以其結非一、其

族多門、苗裔尚繁。濫訴無次、各迷所欲、不顧
礼義。朕竊思量、理不可然。自今已後、宜改前
例、簡定立郡以奉譜察重大之家、嫡々相繼、莫
用旁親、終塞爭訟之源、永息窺竊之望。(下略)

冒頭に「頃年之間」とあるのは、天平二十一年より
この位の年数をさかのぼって言ふのが明白ではない
が、これが古記の撰述年代とされる頃とは相おほ
ふものであることは、先づ認めて良いであらう。そ
して、その頃、郡領の任用には「譜察優劣・身文能
不・舅甥之列・長幼之序」が顧みられてゐたといふ
のであるが、この勅が改正の理由及び改正後の効果
として挙げてゐるところから察すれば、郡領任用の
基本的資格として「其族」の出身であることが前提
として省略されてゐることが知られよう。そして、
今後「立郡以奉譜察重大之家」と簡定して嫡々相繼
せしめ、傍親を用ふるなからしめんとするのである
から、これによれば、大化立郡以来、代々郡領に任
命されまつた実績を有する「譜察重大之家」が、全
てとは言はぬが大抵の郡に存したことが明らかであ
る。そして、大化立郡に際して郡領に任命されたの
は、言ふまでもなく旧来の地方豪族（即ち汎称とし

ての国造）であるから、この「譜察重大之家」は一
門中に含む「其族」に即ち国造族に外ならない。従
つて、私は郡司制度の発端以来、一貫して郡領には
「国造」(11)（旧地方豪族の汎称）から任用されるの
が実態であつたことを、この勅から立證し得ると思
ふのである。(12) 私の勅文の解釈には或ひは修正を要す
る点があるかも知れないが、少くともこの勅文には
およそ新国造優先の如き法運用が行はれてゐたと考
ふべき余地はないと言はなければならぬ。

次に今一つ、同様趣旨の事例を挙げよう。それは
郡領が終身官であると共に世襲の職であつた事実で
ある。嫡々相繼が明確に規定されたのは、右に見た
如く天平二十一年のことであるが、事實はこれ以前
から父子兄弟の間に世襲されるのが原則であつた。
有名な海上国造他田日奉部直神護の辭はこれを証す
る。その外、和豆氏系図によつても、⁽¹³⁾ 或ひは最近田
中卓氏の紹介された阿蘇氏系図・金判氏系図によつ
てもこのことが知られる。⁽¹⁴⁾ ところで、世襲であつた
といふことは、換言すれば前任郡領の子孫に繼承権
があつたといふことに外ならない。この事實も亦、
新国造優先の任用方式がとられたといふ「行政上の

実施しのびかつたことを示すと言つて良い。

最後に、一層具體的の例を挙げよう。それ口、神龜元年十月十六日、紀伊国名草郡大領たる紀摩祖が紀伊国造に任命されてゐることである。即ち、此如では新国造より郡大領へといふ明法家の説とは反対に、郡大領より新国造へといふ任用の方途が示されてゐる。もとより、これは僅か一例であり、しかもやゝ特殊性を持つ紀伊国造の例であるから、如何様にも解釈し得るであらう。従つてこの例を固執するものではないが、前掲の語彙と併せ考へて頂き度いと思つて、敢て掲げて置くことにする。

以上、乏しい例ではあるが、少くとも私の見るところでは、「行政上の実態」に於いても「法運用」に於いても、明法説の如き、従つて新野氏の主張される如き、新国造に郡領優先任用ありとの説を立證すべき例は見出されない、といふのが私の新たに主張し度い点である。これ口前述の新野氏説の難点を増大し、卑見の政案を減少せしめるに足ると思ふが如何であらうか。

5

新野氏の意旨に接して私の考へ得たことはおよそ以上の如くである。要するに、郡領の補任資格は郡司制度創設以来少くとも大宝令の施行時代までは理想としての大用主義の導入といふ点以外には変化がなく、また政府に変更の意旨もなかつたと考へざるを得ない。そして郡司制度創設の当初、旧地方豪族の汎称としての「国造」から郡領を任用すべきであつたことが明らかである以上、大宝鑑敍令郡司條に言ふ「国造」も、当初の意義と同義に用ひられてゐると解すべきであらう。この方が法文成立史的に觀ても無理のないところであると思ふ。従つてこれを明法説が、新国造の意に解するのは、神祇令諸国大政條の「国造」との語義の統一を求めた結果陥つた誤りであらうと思ふのである。改めて、新野氏ならびに諸賢の御叱正を乞ひ度い。

むすび

本稿口「大化改新後国造」とは應じたものの、かつて発表した蕪稿で取扱つた二点を再び論じたものではなく、況んや新国造に關する全ての問題を論じた訳のものでもない。しかも、口は新国造制設置論

の論據を私なりに確認せんと志したものであり、Ⅱ
下述べたところは、むしろ郡司制度上の問題とも言
へるのであつて、この兩者を同時に論ずることはい
はしがきで述べた如き執筆の動機から余儀なくされ
たものではあるが——、いさゝか木に竹を接いだ感
なきを得ない。従つて、これらを綜合して結論の如
きを導くことは、およそ意味をなさないと思ふので、
省略に従ふこととする。

たゞ、一言、余言として申し述べ度いのは、もし、
天武朝の初世に一国一貢の新国造制度が創設された
といふ私見が、幸ひに大方の御賛同を得られるとす
れば、それは單に神祇制度史上の問題としてのみで
らず、近時、多くの史家の注目を集めてゐる天武朝
の政治を考へる上に、幾分かの寄与となし得るの
ではないかといふ点である。その一端として特に私の
強調し度いことは、小さいことかも知れぬが、国
郡制下の「国」が、この時代に至つて中央集权的な
行政上の單位として確實に把握され、その機能が発
揮することと要求され始めたのではないか、といふ
ことである。もとより、国と行政上の單位とするこ
とは大化以来当然のことと言はなければならぬが、

併し、この「国」は、大化の際に、旧国造所管國を
幾つかずつ編成して新たに設定された行政單位であ
つて、その創設の当初から、その面目を發揮し得た
かは一応疑問としなければならぬ。即ち、我々が
奈良時代の「国」の果した機能とか、比重とかに對
して持つてゐる觀念と、そのより直ちに大化改新後
程経ざる時代の「国」に對してあてはめることは堪
むべきであらうと思ふ。そして、この向に於ける転
機を、改新後三十余年を経た天武朝に求め得るの
ではないかと思ふのである。これは勿論新国造制の設
置といふ觀察のみから言はんとするのではないが、
例へば、国分寺なる理念——實際の寺塔造營は別と
して——の源流を、この時代に見出さんとする説の
如きも参考として、十分考慮に値することではある
まいか。

終りにのぞんで、考察を深化せしめる機縁を提供
された梅田・新野両氏の學思を謝すると共に、両氏
の高論に對し恣いまゝに批判的言辭を述べた点、
偏へに御寛恕を乞ふ次第である。

註

(一) 津田左右吉「大化改新の研究」(『上代日本の

社会及び思想』所収）・植松孝彦「大化改新以後の国造に就いて」(『渾田和民博士記念史学論文集』所収)

(2)「大化改新後の国造」(『若手史学研究七』・「国造に關する二三の管見」(『厂史四』)

(3)氏のあつられたところ曰、註(1)の二論文と田中卓氏の「郡司制の成立下」(『社会問題研究三ノ二』)及び前掲社稿であるが、この外に新野氏の一連の研究(註②及び本文に掲げたものの外に「奈良平安時代の国造」文化一ハノ一)も同説であり、また、太田亮博士の説もほぼこれに近いと言つて良い(『全訂日本上代社会組織の研究』五編や四章や二十二節)。

(4)「美作・備前二国国造」と「吉備国造」との關係は一見矛盾するかの如くであるが、これらは何れも名目的国造であつて、おそらくその名譽と国造田とを与へることが目的と考へられるので、これに拘束される必要はない。たゞ、これらの名称が、かつて吉備国が一国であつた時代、やゝ降つて、美作・備前が備前国一国であつた時代のそれやれ新国造の称呼の遺存し、或ひは変形したもの

と考へ得れば足りるのである。

(5)これは一見、国造氏に非ざる如くであるが、武藏国の事例であることに注意しなければならぬ。井上光貞氏の言はれるやうに(『脚根の懐疑』新刊増補版)、東国国造の特性として、彼らが多く名代や子代又は舍人部・土部等の品部の伴匠と兼ねてゐたといふことを考へると、必ずしも国造氏下になつたと言ひ切れない。

(6)就中、天武五年詔の国造一郡司一戸の順序が、神祇令に於いては毎郡一戸別一國造と変化してゐる点、見逃し得ない重要点と言ふべく、この点は旧稿に於いて述べた通りである。

(7)「給せらるべき」が落着かないと思ふ。この点について新野氏は、「国造田を給せらるべき」の意とされるが(『厂史四註7』)、これは果して如何であらうか。

(8)何れかと言へば、文意から見て新野氏の解の方が良いと思ふが、併し、「以外」の二字は「所管国内」の四字と対応させた方が、構文上は正しいやうにも思はれるのである。

(9)史料解説のみならず、他の学説に対する理解に

も同様の傾向があると思ふ。例へば、津田博士の改新詔令文転載説に反対して、大化二年から養老四年まで四十七余年にすぎないから、「全く存しなかつた事実を捏造した」ところでその效がない。詔の立て方と令の立て方とに相違があること口、「軍に令文を翻案した」とすることに躊躇を覚えたさる、等の吳をあげて居らるが（同氏論文註五）、津田博士は「全く存しなかつた事実を捏造した」とか「令文を翻案した」といふ言ひで居られないのである。

(10)「郡司の非律令的性格」(『史地理五三』一)。

(11)「防人考」(『万葉集大成』一)。

(12)これより先、天平七年五日の制(統紀)によれば、国司が郡領の候補者として式部省に申告すべきものとして、「国擬」を除く外、別に「難波朝廷以歴譜家重太四五人」をえらんで添へ、更にもし、譜家なしでも「身大絶倫并勢家者」があれは、別状に具して添へて上申すべきことになった。卒然としてこれに對すれば、「国擬」即ち国司の選定した郡領候補者には譜家を含まざるが如くにも解せられるが、さうではないと思ふ。譜家な

き者については大用ある場合に限って別状にて上申すべきことをわき／＼断つてゐる以上、この「国擬」もやはり譜家者の者であつたと解して良い。たゞ、政府は国司の選定した候補者のみの中から郡領を決定する意志のないことを示してゐるのであつて、それは、「国擬」の選定に実は国司の功利的な恣意がからまり、政府の最も警戒した国司・郡司の私的結合の主するおそれの存したことを示すに外ならない。従つて、これ以前、專ら「国擬」によつて郡領の任用が行はれてゐた時代にも、その国擬が、やはり、旧地方豪族から選定されてゐたと解して差支へないと思ふ。

(13)この系図について口、註(3)所掲の田中氏の論文参照。

(14)「評(督)」に關する新史料五集」(『日本上古史研究資料』一ノ二)。